岡崎市議会議長　様

支出番号	

会派名　　公明党
代表者名　　野島　さつき

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政務活動旅行報告書

令和　5年　1月　19日提出

活動年月日	令和４年１０月２７日（　木　）	
氏名	畑尻宣長・野島さつき・土谷直樹	
用務先及び内容	1 10月　27日	用務先　豊田市：名鉄トヨタホテル
		内　容 中核市サミット2022in豊田
	2 月　日	用務先
		内　容
	3 月　日	用務先
		内　容
	4 月　日	用務先
		内　容
備　考		

岡崎市議会事務局 受付 5.1.1

政務活動調査報告書

受講日	令和４年10月27日（木）
研修場所	豊田市：名鉄トヨタホテル
講座名	『中核市サミット2022in豊田』 多様な主体とつながり、つくり、暮らし楽しむ ～中核市が描く「ミライのその先」～
受講者名	畑尻宣長・野島さつき・土谷直樹
研修の内容	開会式 基調講演 パネルディスカッション 全体会議・閉会式

『中核市サミット2022in豊田』

多様な主体とつながり、つくり、暮らし楽しむ
～中核市が描く「ミライのその先」～

◆ 基調講演「ミライの未来を探る～AI・組織・コミュニケーションの視点から～

日本大学文理学部情報科学科助教
次世代社会研究センターセンター長　　大澤　正彦氏

◆ パネルディスカッション

第１会場「時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ」

【コーディネーター】名古屋大学名誉教授　　山田　基成氏
【コメンテーター】　有志団体Dream On代表　　中村　翼氏
【パネリスト】　姫路市長　　清元　秀泰氏
　　奈良市長　　仲川　げん氏
　　松江市長　　上定　昭仁氏

第２会場「多様なつながりと描く地域共生社会のミライ」

【コーディネーター】同志社大学社会学部教授　　永田　祐氏
【コメンテーター】　日本大学文理学部情報科学科助教
　　次世代社会研究センターセンター長　　大澤　正彦氏

【パネリスト】　岐阜市長　柴橋　正直氏
吹田市長　後藤　圭二氏
豊田市長　太田　稔彦氏

◆　全体会議
コーディネーターによる
パネルディスカッションの報告等
『サミット宣言』

＜所　感＞・・・畑尻宣長

基調講演として、日本大学文理学部　情報科学科　大澤正彦助教授から「未来の未来を探る」AI・組織・コミュニケーションの視点から、と題し話をお聞きしました。ドラえもんを創りたいというところからの発想で、子供のころからの夢を追いかけ続けているという、現実とかけ離れているようで、実は身近なところでの事柄を通し、説明をして頂きました。

まずは、環境構築と技術開発のロードマップ作りです。その過程では、あらゆる価値を認め合うコミュニティをベースとした研究と開発が大事だということでした。そこで進められたのが「全脳アーキテクチャ若手の会」です。多種多様な老若男女がフラットな議論を交わす場を創設し、今では2600人もの方が参加しているということでした。そして100人で100人の夢を叶えることが出来たら、1万人規模の価値創造が出来るのではないかとの発想でした。総じて夢を実現するための道筋をみんなで考え、創りあげていくことで、不可能を可能に出来るのではないかと思えてきました。

次世代社会研究センター（RINGS）では、誰かのやってみたい、面白い、助けてが、即、人との出会いに直結するような仕組みを作り、ノウハウよりもノウフウが醸成される場所を設けました。こういった新しい発想での実効性を持った取り組みが聞けたことは、政策を実現させていく上で重要なことだと気付かされました。これからもこういった場には、積極的に参加していくべきだと思いました。

その後、第一会場にてパネルディスカッションでは、「時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ」と題し話をお聞きしました。パネリストの清元秀泰　姫路市長からは、地域脱炭素の将来像を示しながら、率先して旗振り役をするのが行政の役割であるということでした。経済という観点からは、どうしても脱炭素は、足枷になってしまっている。だからこそ、2050年の姿は、どうなっているのか、具体的に進めていかなくてはならない。今のままでは１％しか進まない。そこで、産官学連携によるカーボンニュートラルポート形成計画を推進していくということでした。本市においても、具体的な方向性に基づく施策を打ち出し、実現に向け動き出す必要を感じました。

次に、仲川げん　奈良市長からは、若年層の流出、女性就業率の低さの課題解決に向け、企業誘致に力を入れた結果、パーソナルテンプスタッフが、全国11都市から奈良市が選ばれ、立地に至ったとの報告がありました。奈良市の強みである、市内に7大学、1短大、17

専修学校が立地し、優秀な人材が多かったことが決め手となったということでした。ここからわかることは、まち自体が「雇用を生み出し、次世代の担い手を育てていく」というサイクルを生み出すことで、「選ばれるまち」の実現に繋がったというものです。本市においても、現状は、車産業がメインとなっているものの、これからは、女性が活躍できるまちづくりに取り組む必要性に迫られていると感じています。

最後に、上定昭仁　松江市長からは、持続可能な産業と暮らし～温故知新～として話をお聞きしました。始めから最後まで、松江市の魅力、特色のみをアピールするものばかりでした。歴史と伝統を観光産業に活かしていました。「観る」「触れる」「創る」という体験から、「にぎわい」「愛着」「誇り」が生まれるとし、伝統を大切にして暮らす中で、新しい「本物」が生み出されるということでした。古いものを大切にし、新しいものを創っていく、「循環」のまち松江として、市長自ら、まちへ出てアピールしていました。古いものを活かす、持続可能な産業と暮らしを形作る、いわゆる温故知新を体現しているような施策でありました。この話を聞いて、まだまだ本市も活かしきれていないところが大いにあると感じました。しっかり歴史遺産など、整理し持続可能な産業へと創っていけるよう提案して参りたいと考えています。

＜所　感＞・・・野島さつき

中核市サミット 2022in 豊田では、『多様な主体とつながり、つくり、暮らし楽しむ～中核市が描く「ミライのその先」～』をテーマに、時代の変化にしなやかに適応する「産業のミライ」と多様なつながりと描く「地域共生社会のミライ」について議論を深めました。

大澤助教の基調講演では、「ともにドラえもんをつくる」こと。「つくる」とは、求める未来をつかみ取ること、「ともに」とは、たくさんの仲間たちと共に歩む術。合言葉は 100 人で 100 人の夢をかなえること。今の世の中は、合理性を求め、人に寄り添うエネルギーが枯渇している。だれもが「助けて」といえる世の中になるといい。とのお話でした。1 人ではできないことも、支えあい、情報共有し、連携していくことで、多様な人がつながることができ、解決に結びついていくと感じました。

分科会は「多様なつながりと描く地域共生社会のミライ」に参加しました。豊田市では、『幸福寿命＝健康寿命+快適期間（自立した生活ができなくても、サポートを必要としながらも快適に過ごせる期間）』とし、誰一人取り残さない包括的な支援体制を構築しています。個別サービスの開発等を民間事業者へ依頼し参加型支援を行ったり、大学や医師会、トヨタ自動車等が連携協定を結び、先進技術を活用した地域リハイノベーションセンターや在宅療養に取り組んでいます。岐阜市では、働きづらさを抱える方が、自分らしく働ける環境を整えるため、超短時間雇用創出事業やテレワークを活用したショートタイムワーク事業を開始、さらに日本財団とともに、障がい者手帳がなくても公的支援がうけられるよう、障がい者総合支援法で定める就労移行支援事業所等を活用したモデル事業も始めました。これまで働く機会に恵まれなかった方の居場所や出番を創出することで、誰もが幸せを実感できるまちを目指しています。吹田市からは、自治体間連携の取組が紹介されました。災害時の支援受援

や消防指令センターの共同運用のほか、人事交流も行い職員の視点が向上したとのことでした。

3 つの市の事例から、制度の狭間や複合的な困りごとに対し、地域資源を有効に活用し、「支える側、支えられる側」ではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、多様なつながりで解決できることがまだまだあると感じました。「人とのつながり」「助け合い」を今一度見直し、本市にできることを探していきたいと思います。

＜所　感＞・・・土谷直樹

基調講演では、日本大学の大澤正彦助教から『未来の未来を探る』～ＡＩ・組織・コミュニケーションの視点から～と題し話をされました。物心ついた時には、ドラえもんをつくりたいという気持ちが強く、学生時代からドラえもんをつくることだけを目指して、どのような知識が必要になるのかを考え、勉強し、大学時代にはＡＩの研究をされました。ドラえもんを完成させるためには、情報工学だけでなく、分野の異なる研究者や、プロボノ、パートナー企業の参加者同士がつながり、お互いの考えていることをリスペクトし合いながら、研究に取組むことが重要。

従来の組織の枠組みの中にあったしがらみから解放されて、誰もが自分のやりたいことの探究ができる場「次世代社会研究センターＲＩＮＧＳ」を２０２０年に立ち上げました。ＲＩＮＧＳの特徴はプロジェクトをベースにするのではなく、コミュニティをベースにしていることです。仲間同士がつながっているというコミュニティが最初にあって、プロジェクトの方があとから出てくる。そこが既存の組織と大きく違う。ＲＩＮＧＳには、様々な立場や分野の人が参加し、お互いを認め、話をしている。「100 人で 100 人の夢を叶える」をビジョンとして掲げているとのことでした。何かを実現しようとするときのエネルギーをいただきました。政策の実現に向けての取組む姿勢を学ばせていただきました。

第２会場のパネルディスカッションでは「多様なつながりと描く地域共生社会のミライ」と題し話をされました。

豊田市の報告では、誰ひとり取り残さない包括的な支援体制の構築として、行政のみでは対応できない事案に対し、行政と民間が一緒になり「とよた多世代参加支援プロジェクト」を立ち上げ市民の困りごとを具体的にプラン化している。事例として万引きを繰り返してしまう市民に対しこのプロジェクトを活用。万引きをするのではなく役割を担ってもらい居場所を作り、社会との関わりづくりを行っている。豊田市地域生活意思決定支援事業では、今後増大・多様化する権利擁護支援ニーズに対する新たな仕組みを構築。「生活基盤支援サービス」と、「意思決定支援」の組合せによる支援をモデル的に実施。また快適期間を充実する取組みでは、豊田市・トヨタ自動車・藤田医科大学・豊田地域医療センターの５者協定の具現化・情報発信の拠点となる「地域リハイノベーションセンター」の設置。訪問看護師育成センターと総合療法士育成センターのある「地域医療人材育成センター」を設置。幸福寿命を全うできるまち「豊田」を目指して人材育成にも取組まれている。行政と民間が一緒になり民間の活力を最大限に生かした取組みを学びました。

岐阜市の報告では、自分らしく働ける雇用のあるまち～ワークダイバーシティの推進～として、人口減少・少子高齢化により、生産年齢人口が減少し、労働力が不足。そのため雇用に着目しているとの報告がありました。超短時間雇用創出事業では、障がいのある方や難病を患った方は疲れやすく長時間勤務は難しい。短時間のテレワークであれば就労できるセンターをつくり、１５０件を超える相談支援を受け、実際の雇用につながったとのことでした。テレワークを活用したショートタイムワーク事業では、出産や育児によりフルタイムワークが難しい場合に時間や場所に縛られないテレワーク体制ができることで、円滑な職場復帰やキャリア形成に支障がないなど、女性活躍推進には必要な事業だと感じました。ワークダイバーシティ実証化モデル事業では、働きづらさを抱えている市民の就労支援と自立を支援することを目標とすることで社会参加へと繋がっています。３つの事業は切り離されたものではなく、働き方を見直すことにより、需要と供給のバランスが保持され、一人の人間としての存在を認められることにもつながると感じました。課題ともなっている障害者雇用促進法の法定雇用率に達しないため、企業側の負担や雇用に歯止めがかかっていることについても、柔軟な対応ができるようになればさらに雇用も進むと思われます。

吹田市の報告では、中核市アライアンス～新たな圏域デザインと題して、西宮市(N)、尼崎市(A)、豊中市(T)、吹田市(S)の４市がＮＡＴＳとして共有同調している。市で解決できないことの事例として、災害発生時には１市だけで解決するのではなく、圏域で助けられつつお助けするなど、相互に助け合うことで迅速な救援活動や、復興にもつながること。災害でなくとも消防・消火活動には必須であることも理解しました。連携協定は災害時に発災後すぐに協定書を締結することもできないので、事前に体制を整えておくことも重要です。体制がなければ初動の遅れにもつながります。日頃より圏域で動くことで発災にも備えることができると思いました。今回の中核市サミットでは多くの事を学ばせて頂きました。今後の活動に生かしていきたいと思います。

以　上